

4-2 メゾスコピック計測研究センター

メゾスコピック計測研究センター（以後「本センター」）は、旧分子制御レーザー開発研究センター（1997年4月設立）からの改組により、2017年4月に設立された。分子科学研究所の研究対象は、広い意味での分子物質であることは設立当初から変わらないが、当初は一つ一つの分子の挙動に重点をおいて注目されていたのが、最近では様々な分子やナノ構造体などがシステムを作って発現する機能・特性の解明と制御、及び新しい機能を持つシステムの構築に重点がシフトしてきている。それによって、分子の物質・エネルギー・情報変換能力を精緻に引き出すことが初めて可能になると考えられる。そのような新しい研究の方向性に対応する一つの方策として、分子科学研究所では2013年4月に協奏分子システム研究センターが設立されたところである。

分子計測の先端的手法では、時間、空間、波長、パワーなどにおいて極限に向かう方向が精力的に推し進められ、大きな成果を上げてきた。そうした手法では、理想化された極限条件下で系に大きなエネルギーの擾乱を与えて素過程の挙動を解析する方法が一般的であった。現在もその方式の重要性に変わりはないが、このような従来型計測法の可能性と限界も少しずつ明らかになってきている。本センターでは、従来の手法とは一線を画した、繊細・広帯域・多次元の計測解析手法で分子システムの挙動・機能のありのままの姿に迫り、また低摂動・超精密制御で新たな量子機能を創出する、革新的実験法の開発が必要という立場をとる。新たな分子能力の創発の現場を、マクロ階層の強靱でロバストな性質と、ミクロ階層の機能に富む特性が絡んだメゾスコピック領域に求め、分子の機能や反応の契機となる過程を明らかにするために、広い時空間領域で階層間のエネルギー・情報の変換を可視化する新発想の計測開発手法を開発する。（ここでいうマクロ、ミクロ、メゾスコピックは、相対的な階層であり、扱う系によって実際のスケールは異なる。また空間だけではなく、時間領域についてもメゾスコピック領域が考えられる。）これらを通じて、分子の素過程が系全体の大域的な機能を生む機構を解明する研究などに主眼を置いて推進する。この目的のために、旧分子制御レーザー開発研究センターの研究業績・資産を引き継ぎながらも、分子科学研究所の基盤となる四つの領域から関連する研究を遂行する研究者の参画を得て、それらをまたぐ領域横断的なセンターとして設置することとした。これにより、同様な組織構成を取った協奏分子システム研究センターとともに、分子物質のシステムとしての挙動・機能を研究する両輪として研究活動を展開することが可能となった。

このような新しい分子計測制御法を開発・利用していくためのセンターとして、2017年4月の発足時に以下の3部門と担当教員を置くこととした。

(1) 物質量子計測研究部門：大森賢治（教授，光分子科学研究領域からの兼任），信定克幸（准教授，理論・計算分子科学研究領域からの兼任）

(2) 繊細計測研究部門：岡本裕巳（教授・センター長，専任），平等拓範（准教授，専任）

(3) 広帯域相関計測解析研究部門：飯野亮太（教授，生命・錯体分子科学研究領域からの兼任），藤 貴夫（准教授，専任）

専任研究グループに所属する助教等のスタッフも本センターの各研究部門に所属する。また、旧分子制御レーザー開発研究センターに所属した技術職員も、引き続き本センターに所属させる。今後分子科学研究所に採用される教授・准教授も、状況に応じて上記のいずれかの部門の専任または兼任ポストを占めることが想定されている。それぞれの部門の任務は、(1) 蓄積のある光観測・制御法を先鋭化し、更に量子系の構造変形を操作することによって、新しい量子相を作り出して制御し、量子情報処理など新規な分子の能力を引き出す；(2) 時空間を分解した計測法，増強光場を利用した超高感度・並列計測等による低摂動で繊細な分子計測法等を開発し，分子のありのままの姿を非破壊的に観測する；(3) 多変数スペクトロスコピー・多次元解析手法，高分解能広帯域計測法とその解析法を開発して分子の能力とそれを司る物理過程を明らかにし，従来とは質の異なる情報を獲得する革新的手法を開拓する；等を目指している。なお，信定准教授は2018年1月に残念ながら逝去された。平等准教授は2018年10月に理化学研究所（放射光科学研究センター）に，また藤准教授は2019年

4月に豊田工業大学に、それぞれ転出した。これらの研究領域の扱いについては今後の検討となる。一方、2018年5月には杉本敏樹准教授（物質量子計測研究部門）が物質分子科学研究領域からの、また2019年11月には江原正博教授（繊維計測研究部門）と南谷英美准教授（物質量子計測研究部門）が理論・計算分子科学研究領域からの併任として就任した。南谷准教授は2022年9月に大阪大学に転出した。2021年4月からは、熊谷 崇准教授が広帯域相関計測解析研究部門に専任で就任した。2025年度末での岡本センター長の退職、その後のセンター活動の継続を見据え、専任教授を公募し、最終候補者が決定し（2026年5月着任予定）、またセンター長業務の後任者への引き継ぎを行った。

以上のような方針で分子システムの計測解析に関する研究を遂行すること、及びそれを通じて我が国の関連研究コミュニティにおける人材育成に寄与することが本センターの主なミッションであるが、同時にここで開発された新しいメゾスコピック計測手法を共同研究に供することも重要な機能の一つである。各研究グループの協力研究やその他のチャネルの共同研究を通じてそれを実施するほか、適宜醸成された計測手法・技術に関するセミナー等を開催する。また、さらに新たな革新的計測手法の開拓を念頭に置いた、萌芽的研究テーマとアイデアの発掘、可能性及び将来構想を議論する研究会等の開催も行っている。旧分子制御レーザー開発研究センターでは、分子科学研究所と理化学研究所の連携融合事業「エクストリーム・フォトンクス」を推進する母体となり、その主な研究活動終了後も、合同シンポジウム等の活動を自主的に継続してきたが、本センターはこの活動の一部を継続して推進した。なお、旧分子制御レーザー開発研究センターは、発足当初、種々の共用機器を保有して施設利用に供していたが、現在ではそれらの機器とその利用は全て機器センターに移っており、それを受けて本センターでは施設利用は想定していない。

繊細計測研究部門

岡本 裕巳（教授）（2000 年 11 月 1 日～2026 年 3 月 31 日）*）

AHN, Hyo-Yong（特任助教（共創戦略統括本部））

CHENG, An-Chieh（特任助教）

石川 晶子（技術支援員）

伊藤 敦子（事務支援員）

A-1) 専門領域：ナノ光物理化学

A-2) 研究課題：

- a) キラルナノ・マイクロ物質における局所的なキラル光学効果とその応用
- b) 光によるナノ物質の力学操作手法の開発

A-3) 研究活動の概略と主な成果

- a) 光学活性分光手法と顕微イメージングを組み合わせた新手法を開発し、それらを用いたナノ・マイクロ物質の局所光学活性に関する基礎研究、及び応用研究を推進した。ナノレベルの空間分解能での測定が可能な近接場光学顕微鏡による光学活性イメージングでは、主にキラルな構造を持つ金ナノ構造体を対象とし、局所的な円二色性信号が巨視的な円二色性信号に比べて極めて大きくなること、高い対称性を持つアキラルな金属ナノ構造においても局所的には強い光学活性を示すこと、局所的な誘起双極子が局所的な円偏光場の起源になること等、幾つかの基礎的に重要な結果を得た。その成果を基礎として、蛍光分子とキラルな金属ナノ構造の組み合わせにより、高い円偏光度を示す蛍光が得られ、その起源をプラズモンモードとの関連において明らかにした。通常の遠方場の顕微鏡においても光学活性によるイメージングは国際的にも未開拓であるが、我々は高い精度・確度で顕微光学活性イメージングを可能とする実験手法を開発し、微結晶試料、生体組織等への応用を、共同研究を通じて推進した。キラルな構造を持つ金属有機構造体（MOF）微結晶の掌性同定に成功し、多数の微結晶でそれぞれの掌性同定に有効であることを示した。液晶分子集合体をテンプレートとした螺旋状金微粒子集合体では、螺旋の掌性による円二色性信号の差を検出することに成功した。所内の共同研究で、有機スピントロニクス物質のキラル結晶の掌性同定にも有効に活用された。この他にも主として所外の研究者と共同で、様々なキラルナノ物質の観察・同定に用いる研究を推進し、また円二色性イメージングの医療応用を想定した基礎研究も、医科学分野の研究者と共同で行った。更に感度や測定速度を向上させる試み、波長範囲を拡張する試み等を推進した。また、それらの基盤的情報に基づき、円偏光によるキラル構造物質の創出に関する研究展開も進め、キラルでない系に円偏光を作用させることでユニークなキラルらせん構造が創出できることを、実験的に示した。
- b) レーザー光を強く集光すると、その焦点に微粒子がトラップされる（光トラッピング）。非線形効果、共鳴効果、偏光を有効利用することで、このような光による力学的マニピュレーションの自由度が格段に広がることが予想される。この研究展開を図ることを、現在の研究活動の今一つの柱とした。キラルな物質においては、左右円偏光に対する力学的な作用が異なることが期待され、我々はキラル金ナノ微粒子の円偏光による光トラッピングを行いその挙動を調べた。その結果、光トラッピングに関する従来知られている機構では説明困難な部分が見いだされ、理論的に解

積した。これにより、キラル物質の光マニピュレーションの基礎となる知見を得た。更に、キラル金ナノ微粒子の光圧による輸送についても、円偏光の掌性による差があることを実証した。さらに、このような光の力学作用を利用した、原子間力顕微鏡の原理に基づく顕微イメージング法（光誘起力顕微鏡）でナノ構造上のキラルな光場を可視化する手法の開発も行った。

B-1) 学術論文

Y. XUAN, D. MIYAZAKI, Y. ISHIKAWA, H. OKAMOTO and M. SADGROVE, “Creation and Detection of Optical Spin in a Coupled Emitter–Plasmon System,” *Nano Lett.* **26(6)**, 2129–2135 (2026). DOI: 10.1021/acs.nanolett.5c05644

H.-T. SU, H. NIINOMI, A.-C. CHENG, Y. Y. TANAKA, K. SASAKI and T. SUGIYAMA, “Enantioselectivity Switch in Chiral Crystallization Using Optical Trapping with Gold Nanoparticles,” *Cell Rep. Phys. Sci.* **5(12)**, 102310 (2024). DOI: 10.1016/j.xcrp.2024.102310.

B-3) 総説, 著書

岡本裕巳, 山西絢介, マーク・サッドグローブ, 「キラル物質における円偏光による光圧」, *応用物理*, **95(3)**, 152–156 (2026).

岡本裕巳, 「ナノ構造物質のキラル光学効果」, *フォトニクスニュース*, **11(2)**, 56–60 (2025).

L. V. BESTEIRO, Y. LIU and H. OKAMOTO, “Chirality of Plasmonic Structures and Materials,” *J. Chem. Phys.* **161(18)**, 180401 (2024). DOI: 10.1063/5.0244919

B-4) 招待講演

岡本裕巳, 「キラル光学顕微イメージングと、キラル近接場–物質相互作用」, 第 73 回応用物理学会春季学術講演会 シンポジウム「光とキラリティー：その科学と応用」, 東京, 2026 年 3 月.

岡本裕巳, 「プラズモン物質のキラル光学効果, キラル近接場相互作用」, 第 29 回プラズモニク化学シンポジウム, 東京, 2025 年 12 月.

H. OKAMOTO, “Chiro-optical microscopy to observe chiral fields in micro-/nano-structured samples,” Structured Light and Materials Workshop 2025, Taipei (Taiwan), November 2025.

岡本裕巳, 「『ねじれた光』で見る左と右, 鏡写しの世界」, 第 144 回分子科学フォーラム, オンライン開催, 2025 年 11 月.

H. OKAMOTO, S. HASHIYADA, H.-Y. AHN and J. YAMANISHI, “Chiro-optical microscopy and chiral near-field interaction between plasmon resonances and molecules,” PIERS2025 (Photonics and Electromagnetics Research Symposium) in Chiba, Chiba (Japan), November 2025.

J. YAMANISHI, H. OKAMOTO and H.-Y. AHN, “Optical Force Nanoscopy of Chiro-Optical Effects in Photoinduced Force Microscopy,” 33rd International Materials Research Congress (IMRC2025), Cancun (Mexico), August 2025.

J. YAMANISHI, H.-Y. AHN and H. OKAMOTO, “Optical Force Nanoscopy of Circular Dichroism in Photoinduced Force Microscopy,” 15th International Conference on Metamaterials, Photonic Crystals and Plasmonics (META2025), Malaga (Spain), July 2025.

H. OKAMOTO, S. HASHIYADA, H.-Y. AHN and J. YAMANISHI, “Chiro-optical microscopy of plasmonic materials and chiral near-field interaction with molecules and materials,” 15th International Conference on Metamaterials, Photonic Crystals and Plasmonics (META2025), Malaga (Spain), July 2025.

H.-Y. AHN, J. YAMANISHI and H. OKAMOTO, “Utilization of strong chiro-optical field near chiral and achiral plasmonic nanostructure: Chiral emission and photofabrication,” 15th International Conference on Metamaterials, Photonic Crystals and Plasmonics (META2025), Malaga (Spain), July 2025.

H.-Y. AHN, J. YAMANISHI and H. OKAMOTO, “Plasmonic chiro-optical field for circularly polarized luminescence and chiral structure fabrication,” The 11th International Conference on Antennas and Electromagnetic Systems (AES2025), Tangier (Morocco), July 2025.

B-5) 特許出願

登録

EP4300059, “Circularly Polarized Light Illuminator, Analysis Device, and Microscope,” H. OKAMOTO and T. NARUSHIMA (National Institutes of Natural Sciences), 2022 年. (登録日 2025 年 5 月 21 日)

40106088, “Circularly Polarized Light Illuminator, Analysis Device, and Microscope,” H. OKAMOTO and T. NARUSHIMA (National Institutes of Natural Sciences), 2022 年. (登録日 2025 年 9 月 5 日)

特許第 7749245 号, 「円偏光照射器, 分析装置及び顕微鏡」, 岡本 裕巳, 成島 哲也 (自然科学研究機構), 2022 年. (登録日 2025 年 9 月 26 日)

B-7) 学会および社会的活動

学協会役員等

プラズモニク化学研究会副会長 (2020–).

学会の組織委員等

33rd International Materials Research Congress (IMRC2025), symposium organizer (2025).

Pacificchem 2025, symposium organizer (2025).

文部科学省, 学術振興会, 大学共同利用機関等の委員等

日本学術会議会員 (2020–2026), 化学委員会委員長 (2023–2026).

東京大学アト秒レーザー科学研究機構連携協議会「ユーザー設備開発・利用研究」分科会委員 (2024–2025),

「アト秒ビームライン II (高繰り返し型) と計測」分科会委員 (2025–2026).

その他

学術変革領域研究 (A) 「光の螺旋性が拓くキラル物質科学の変革」事務局 (2022–2027).

B-10) 競争的資金

科研費学術変革領域研究 (A), 「超螺旋光とナノレベル物質のキラルな動的相互作用」, 岡本裕巳 (2022 年度–2026 年度).

科研費学術変革領域研究 (A) (総括班), 「光の螺旋性が拓くキラル物質科学の変革」 (代表者: 尾松 孝茂), 岡本裕巳 (研究分担者) (2022 年度–2026 年度).

C) 研究活動の課題と展望

着任以来、ナノ構造物質の観察と、特徴的な光学的性質、励起状態の超高速ダイナミクス等を探るための、近接場分光イメージング装置を開発し、試料の測定を行ってきた。その中で近接場光学活性イメージング法を開発して金属ナノ構造の局所光学活性、キラルな光場の空間構造の解析に用い、そこからグループの主要な研究内容をキラル物質の局所光学活性のイメージングにシフトした。金属ナノ構造の近接場光学活性イメージングによって、独自の実験的情報を得ることができ、プラズモン由来の強くねじれた局所光場の存在、また対称性の高いアキラルな構造でも局所的に強い光学活性を示すという、ユニークな成果も得られた。これらの研究から得られたプラズモンのキラリティに関する性質を基礎として、キラルプラズモンが分子の特性に及ぼす効果に関する研究にも展開し、高い円偏光度を示す発光物質系を見出しその起源を解明するなど、成果が得られるようになった。通常の(遠方場)顕微鏡で精度の高い円二色性イメージングを可能とする装置開発も行い、これは物質開発、生物科学、結晶学等の様々な分野の研究者から興味を持って頂いている。これらの近接場及び遠方場円二色性イメージングは、今後様々なナノ・マイクロ構造光学活性物質の機能解明のための有力な実験手法になることを期待しており、国内外との共同研究を数件行った。円二色性顕微鏡に更に新たなアイデアを導入して、汎用性の高い、ロバストな装置とする開発は継続しており、共同研究者が今後も展開する予定である。また物質および光のキラリティは磁性との相関においても興味が持たれ、ナノ光学の観点からこの方向への研究展開について共同研究も行った。更に、円二色性イメージングの医療応用に関する共同研究も行った。微粒子の光による力学的マニピュレーションについても、キラル微粒子の光トラッピング・輸送に関する新たな成果が得られ、今後その展開にも期待したい。これらを総合した新たな方向への展開として、キラルな光-物質相互作用による、物質キラリティの創出の試みを進める科研費学術変革領域研究(A)が採択されており、その成果の取りまとめを行う予定としている。

*) 2026 年 3 月 31 日定年退職

広帯域相関計測解析研究部門

熊谷 崇（准教授）（2021 年 4 月 1 日着任）

西田 純（助教）

LEE, Lu-Hsin（大学院生）

福富 実（大学院生）

鎌田 一輝（特別共同利用研究員）

伊藤 敦子（事務支援員）

A-1) 専門領域：物理化学，走査プローブ顕微鏡，近接場分光，単一分子科学，超高速ダイナミクス

A-2) 研究課題：探針増強近接場分光を基軸としたナノ物質科学の研究

- a) 超高真空・低温探針増強近接場分光による原子スケールの光と物質の相互作用の解明
- b) 超短パルスレーザーと探針増強近接場分光を融合したナノスケールコヒーレント分光の開発と応用
- c) 超高速探針増強顕微分光に基づく多次元・多変量ナノ顕微分光の開発と低次元ナノ物質への応用

A-3) 研究活動の概略と主な成果

- a) プラズモニックナノ接合では，局在表面プラズモン共鳴の励起を介して強く局在化した光電場を発生させることができる。この強く局在化した光電場の性質と，それによって引き起こされる光物理・光化学現象について超高真空・低温探針増強顕微分光によって調べている。最近の重要な成果として，金属単結晶表面に吸着した単一原子のラマン散乱の計測を行い，原子スケールにまで閉じ込められた光電場の存在を証明し，原子スケールの光と物質の相互作用について新しい知見を与える研究を報告している [*ACS Nano* **17**, 10172 (2023)]。
- b) 超高真空・低温走査トンネル顕微鏡のプラズモニックナノ接合に発生する強く局在化した光電場を操る技術と，超短パルスレーザーとを組み合わせるアプローチによって時空間極限におけるナノスケールコヒーレント分光の開発を行っている。最近の重要な成果として，金属単結晶表面上にエピタキシャル成長させた酸化亜鉛超薄膜においてコヒーレントフォノンをナノスケールで直接観測することに成功している [*Science Advances* **8**, eabq5682 (2022)]。
- c) 原子間力顕微鏡に基づく非開口型近接場光顕微分光と，超短パルスレーザーとを組み合わせたナノスケール非線形分光の開発を行っている。この新しい先端計測技術によって，次世代の機能性材料やデバイスの基盤となるナノ物質科学の分野へと展開している。最近の成果として，原子層物質における光誘起ダイナミクスをナノスケールで直接観察し，その微視的機構を解明した研究を報告している [*ACS Photonics* **12**, 207 (2025); *Science Advances* **11**, eadv9584 (2025)]。

B-1) 学術論文

K. KIM, L. HOU, M. ABE and T. KUMAGAI, “Real-Space Observation of Metal–Insulator Transition of Individual Anisotropic Nanodomain in VO₂/TiO₂(110) Thin Films,” *e-J. Surf. Sci. Nanotechnol.* **23(3)**, 262–269 (2025). DOI: 10.1380/ejssnt.2025-035

J. NISHIDA, K. OTSUKA, T. MINATO, Y. K. KATO and T. KUMAGAI, “Ultrafast Infrared Nano-Imaging of Local Electron–Hole Dynamics in CVD-Grown Single-Walled Carbon Nanotubes,” *Sci. Adv.* **11(25)**, eadv9584 (2025). DOI: 10.1126/sciadv.adv9584

A. SHIOTARI, J. NISHIDA, A. HAMMUD, F. SCHULZ, M. WOLF, T. KUMAGAI and M. MÜLLER, “Scattering Near-Field Optical Microscopy at 1-nm Resolution Using Ultralow Tip Oscillation Amplitudes,” *Sci. Adv.* **11(24)**, eadu1415 (2025). DOI: 10.1126/sciadv.adu1415

A. SHIOTARI, S. LIU, G. TRENINS, T. SUGIMOTO, M. WOLF, M. ROSSI and T. KUMAGAI, “Picocavity-Enhanced Raman Spectroscopy of Physisorbed H₂ and D₂ Molecules,” *Phys. Rev. Lett.* **134(20)**, 206901 (2025). DOI: 10.1103/PhysRevLett.134.206901

X. ZHANG, R. MATSUO, Y. YAHANO, J. NISHIDA, K. NAMURA and M. SUZUKI, “Configurable Vibrational Coupling in Laser-Induced Microsecond Oscillations of Multi-Microbubble System,” *Small* **21(20)**, 2408979 (2025). DOI: 10.1002/smll.202408979

B-3) 総説, 著書

T. KUMAGAI, K. MIWA and B. CIRERA, “Point-Contact Tip-Enhanced Raman Spectroscopy: Picoscale Light–Matter Interactions within Plasmonic Cavities,” *Nano Lett.* **25(43)**, 15449–15459 (2025). DOI: 10.1021/acs.nanolett.5c04045

J. NISHIDA, “Infrared Nano-Spectroscopy and Imaging on Spatially Confined Nanomaterials,” *Jpn. J. Appl. Phys.* **64(4)**, 040802 (2025). DOI: 10.35848/1347-4065/adc26e

B-4) 招待講演

熊谷 崇, 「ピコスケールのラマン分光」, 先端光科学研究の新展開, 愛知, 2026年3月.

熊谷 崇, 「Frontiers in Surface Science Opened by Advanced Nanometrology」, 現代表面科学の到達点とフロンティアを超えて, 千葉, 2026年2月.

西田 純, 「超高速赤外散乱ナノイメージングによる低次元半導体局所ダイナミクスの解明」, 表面・光融合先端計測研究会 SPARC, 岡崎, 2025年12月.

西田 純, 「単一タンパク質の赤外ナノ分光」, VUV-SX 領域の光科学による生命科学, 岡崎, 2025年10月.

熊谷 崇, 「探針増強近接場分光の最前線 単一原子・単一分子・ナノマテリアルの精密分光」, R7年度第1回合成横断技術領域ワークショップ, 東京, 2025年7月.

T. KUMAGAI, “Point-Contact Tip-Enhanced Raman Spectroscopy: Picoscale Light–Matter Interactions within Plasmonic Cavities,” AVS Taiwan Chapter Symposium, Chiayi (Taiwan), January 2026.

J. NISHIDA, “Application of ultrafast infrared nano-imaging to low-dimensional materials,” The Physical Society of Japan 2025 Annual Meeting, Hiroshima (Japan), September 2025.

T. KUMAGAI, “Ultrafast Nano-Spectroscopy of Photo-Induced Dynamics in Low-Dimensional Materials,” The 2nd Sino-German Workshop on Surface Science of Complex Systems, Changchun (China), September 2025.

J. NISHIDA, “Ultrafast mid-infrared nano-imaging of local electron–hole dynamics in low-dimensional materials,” SPIE Optics + Photonics, San Diego (USA), August 2025.

T. KUMAGAI, “Ultrafast Nano-Spectroscopy of Photo-Induced Dynamics in Low-Dimensional Materials,” The 82nd Okazaki Conference “Recent Advances and Perspectives of Interfacial Materials and Molecular Sciences lead by Next-Generation Laser Techniques and Computational Science,” Okazaki, Aichi (Japan), July 2025.

T. KUMAGAI, “Toward Atomic-Scale Scattering-Type Scanning Near-Field Optical Microscopy,” STM’25, Seoul (Korea), June 2025.

T. KUMAGAI, “Atomic-Scale Phonon Studies Using Tip-Enhanced Near-Field Optical Spectroscopy,” The 22nd International Conference on Time-Resolved Vibrational Spectroscopy (TRVS 2025), The 77th Yamada Conference, Shiga (Japan), May 2025.

B-7) 学会および社会的活動

学協会役員等

日本表面真空学会中部支部幹事 (2022–).

理科教育活動

「科学三昧 in あいち 2025」指導助言 (2025).

B-8) 大学等での講義, 客員

北海道大学, 客員准教授, 2020年4月–.

北海道大学触媒科学研究所, 招へい教員, 2024年4月–2026年3月.

大阪大学大学院基礎工学研究科, 招へい教員, 2025年4月–2026年3月.

東京大学大学院理学系研究科, 非常勤講師, 2025年4月–2025年9月.

B-10) 競争的資金

科学技術振興機構創発的研究支援事業 (受託研究), 「時空間極限における革新的光科学の創出」, 熊谷 崇 (2021年度–2027年度).

科研費学術変革領域研究(A), 「超高速・超広帯域近接場顕微分光で拓く2.5次元物質の光科学」, 熊谷 崇 (2024年度–2025年度).

科研費基盤研究(B), 「キャリア・励起子輸送の実時空間観測とナノスケール制御」, 西田 純 (2024年度–2026年度).

科学技術振興機構創発的研究支援事業, 「極低温フォノンポラリトニクスによる固体物性制御」, 西田 純 (2024年度–2027年度).

大幸財団自然科学系研究助成, 「単一分子振動コヒーレンスの赤外観測と非線形制御」, 西田 純 (2024年度–2025年度).

科研費学術変革領域研究(B), 「スマートナノ粒子プラズモン共鳴スペクトルの一粒子計測」, 西田 純 (2025年度–2027年度).

C) 研究活動の課題と展望

概要としては, 探針増強近接場分光の先端計測を研究室の柱としてナノ物質科学の新しい学際領域の形成, 革新的な光科学・光技術の創出を目指した基礎研究を展開する。超高真空・低温探針増強顕微分光の技術開発についてはほぼ完了し, 超高感度・超高分解能の顕微分光の原理についても理解が深まっている。今後はこの先端計測を応用し,

不均一触媒や光電デバイスなどの物質機能の根幹に関わる表面の局所的な構造や反応、またそれらの動態についての研究へと展開していく。現在は、これまで探針増強分光があまり応用されていなかった半導体・酸化物表面の計測を進めている。原子間力顕微鏡に基づく超高速探針増強近接場分光については、現在も技術開発要素が残されているが、ナノ物質の計測へと応用を進めることができおり、現在はナノカーボン、原子層物質、有機-無機ハイブリッドペロブスカイト、生体分子などの研究を進めている。今後は多次元・多変量ナノ顕微分光のコンセプトに基づき、ナノ物質の物性・機能について物理化学的な理解を得ることを目的とした研究を展開する。